

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 257 報告

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

2018.12.19

藤森著『日本の近代建築(上、下)』を分析 第23回
—戦前の前川、丹下に加えて、戦後の丹下のこと—

話：三沢浩

■ 寺子屋257は4人の参加でした。今回で藤森著『日本の近代建築(上、下)』についての議論は終了です。この後、戦後にまでつながる「近代建築」の検討を続けていきます。

■ 次回以降の数回はその手がかりとして、講師の三沢浩氏の手掛けたレーモンド事務所時代からの建築について、スライドをまじえながら見ていきます。

■ 戦前に多くの試行錯誤を交えながら「近代」の建築もあり方を探ってきた取組みは、戦後の窮乏の中でも建築構成の純粋さを追求した「木造モダニズム」を成長させ、特に、木造やRC造に素材そのままの純粋性を活かしつつ、直截性、単純性を見失わないで新たな居住空間、建築空間の可能性を見出していきました。

そうした取り組みをどう現在につなげていくのかという視点も今の私たちの課題ではないか、と思ひます。



丹下健三 自邸



菊竹清訓 スカイハウス

新建・寺子屋(モダニズムの研究)257

2018年12月19日(水) 話：三沢浩

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；
藤森著『日本の近代建築(上、下)』を分析 第23回
—戦前の前川、丹下に加えて、戦後の丹下のこと—

1. 前回のXVII(#17)スライドの補足(藤森の著書から)
 - 1) レジューメでのべていても村野藤吾は入れていなかった
 - 2) 前川は終始しているが、著書のレーモンド讃が少なかった
 - 3) 創宇社にふれず、僅かに前川の戦後にふれていた
2. 今回のXVIII(#18)スライドのポイント(藤森著への追加分)
 - 1) 藤森のいう「ツルピカ」とは何かをもう一度
 - 2) 堀口、蔵田、土浦のモダニズムに加えて村野のその後
 - 3) 戦後の丹下、菊竹、増沢洵、清家にもふれている
 - 4) 特に「丹下邸」の木造モダニズム及び戦後の主要作品
3. 「ツルピカ」が日本のモダニズムに影響を与えた
 - 1) アールヌーボー／ミースのモダニズムミースのバルセロナ館まで
 - 2) 土浦、蔵田、山口文象のモダニズム
 - 3) しかし、生田、池辺、清家、増沢洵は違った
4. 「丹下自邸(1951-7)」は木造で日本の「伝統」を先に進めた
 - 1) 木造で和風、ピロティを含めて木造の「国際近代」をすすめていた
 - 2) これは新しい手法であり、同時に「モダニズム」の進歩だった
 - 3) これ以後、丹下は50年代、60年代新風を流した
5. 丹下に続いて菊竹清訓の「スカイハウス(1959)」があった
 - 1) スカイハウスで1960年代の輝ける星となった
 - 2) そして、東北の黒石市の「ほるぷ子ども館(1975)」に至る
6. 関連スライド上映 完

次回 <寺子屋 258> ■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読

近代建築から現代建築へ—三沢浩の建築をスライドで見ながら—その1

話：三沢浩

2019年2月13日

(2019年1月はお休みします。2月は定例第3水曜日でなく、第2水曜日の2月13日に。)

(次回は開催時間を少し早めにします) PM 6:00~

場所：新宿区水道町2-8 長島ビル2階(江戸川橋駅神楽坂駅徒歩5分)

会費：400円 問合：大崎元 (有)建築工房匠屋 VED03705@nifty.com